

複式学級における算数科の単元内自由進度学習 ー主体的に学ぶ児童の姿を目指してー

湯浅町立山田小学校
教諭 前 田 敏 志

【要旨】 本研究では、児童が自分に最適だと考える学習計画を立案し、自分のペースで学ぶ「単元内自由進度学習」を算数科の授業に取り入れ、第3・4学年の複式学級において実践する計画を立てた。「学習計画表」、「カップサイン」、「ICT活用」を主体的な学びを促す手立てとして研究を進めた。一単元分の学習時間を児童に委ねた中でも、知識・技能の定着については、概ね満足する結果であった。主体的に学ぶ児童の姿を目指した本研究において、児童は自ら学びを進めることができた。

【キーワード】 主体的に学ぶ児童の姿、単元内自由進度学習、複式学級、学習計画表、カップサイン、ICT活用、環境設定

1 研究のねらい

文部科学省学校基本調査によると、令和2年度からの5年間、和歌山県では小学校の単式学級が89学級減少しているのに対して、複式学級は20学級増加している。また令和6年度の同調査からは、公立小学校における本県の複式学級は、150学級あり、全国で7番目に多いことが分かった。また、筆者の所属校がある湯浅町においては、4校ある小学校のうち3校に複式学級が設置されている。

筆者は直近の7年間、複式学級の担任として実践を重ねてきた。複式学級の指導においては通常、授業者が一方の学年の指導を行っている際、もう一方の学年は、児童自身で学習を進めていくことが求められる。そのため、所属校では、児童が学習を主体的に進められるように学習リーダーを設定し、どの児童が学習リーダーになっても学習を進行できるようになることや、学習リーダー以外の児童は、フォロワーとして学習リーダーに協力することを大切に取り組んできた。特に、筆者の算数科授業では、学習内容を示した学習メニューを基に、学習リーダーが全員の進捗状況を確認しながら進度を揃えて学習を進めてきた。そのような実践を積み重ねていく中で筆者は、児童が学習意欲を高めるための工夫及び個別の支援や学習内容の定着に効果的な手立てを行うための見取りが、十分できていないと感じていた。その要因が、同時に複数学年を指導することによる困難さにあると考えながらも、指導改善策を見いだせずにいた。しかし、児童に実施した学校生活アンケートにおいて、学習意欲の低さを示す回答が見られたことで、自身の授業を全面的に改善したいと考えるようになった。

また、PISA2022の質問調査における、自律学習を行う自信を問う設問に対する日本のこどもたちの回答は、OECD加盟国37か国中34位と低いことが分かっている。さらに、令和3年1月の中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）において、「これからの学校においては、（中略）個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことが求められる。」（※1）とある。これらのことから、変化を予測することが困難な時代を生き抜くために、こどもたちが自ら学びを進める自信をもつことは重要であると考ええる。

そこで本研究では、授業者が主導する授業ではなく、児童が自ら学習を進める授業へと転換を図ることで自信をつけさせ、そこから学習意欲の向上へとつなげたい。児童が自ら学びを進める自信をもち、自ら学び続けるための原動力となる学習意欲を高く保ち続ける

ことができれば、主体的に学ぶ児童の姿が実現でき、複式学級に限らず全ての学級における学習指導のヒントになると考える。その実現のため、児童が自ら学習を進める「単元内自由進度学習」で実践を行う。

さらに、「単元内自由進度学習」では、授業者が主導しないことから、授業中は、見取りに重点を置くことができ、筆者の課題である、見取りの困難さも解消できると考える。

2 研究内容

「単元内自由進度学習」について、奈須（2021）は、「一単元分の学習時間をまるごと子ども一人ひとりに委ね、各自が自分に最適だと考える学習計画を立案し、自らの判断と責任で自由に学んでいきます。」（※2）と述べ、中谷（2023）は、「教師主導ではなく、子どもの個性や考えを尊重し、学びの方法やペースを柔軟に設定した学習方法は、一人一人の強みや認知特性を考慮でき、子ども自身も自分のスタイルやペースで主体的に学びに取り組む素地となりえます。」（※3）と述べている。これらのことから、児童が自分に最適だと考える学習計画を立案する「単元内自由進度学習」は、児童が主体的に学びに取り組む素地を養う学習方法であると考ええる。

なお、本研究における「主体的な学び」とは、田村（2018）が示す「学習者としての子供自身が自らの学びをコントロールできること」（※4）とする。

（1）単元内における各1単位時間の流れ

松崎（2023）は、中学校での自身の実践において、授業の約9割を占める時間を「ジリツ活動中」と呼び、その前後と合わせて授業を3つの場面に分けている。それを基に、本研究においては、児童にとって見通しをもちやすく、主体的に学びを進められるように「はじめの5分」、「みんなの時間」、「振り返り」として提案授業を行う。

ア 「はじめの5分」

この時間では、前時の見取りや児童の振り返りから、学びの参考となるような児童の学びに向かう姿を共有し、主体的な学びへと向かえるように、教師が学級全体に向けた言葉かけをする。初回の授業では、単元内自由進度学習における目的・学習の流れ・学び方・ゴール等の説明を行う。

イ 「みんなの時間」

この時間では、各児童が自分に最適だと考える学習方法と速度で学習を進める。また、授業者から学ぶことも一つの選択肢として、児童からの求めがあれば、指導する時間を設ける。この間、授業者は、自ら学びを進める児童の学習における取組状況を把握することに努めつつ、他の児童の参考となるような児童の学びに向かう姿を見取る。

ウ 「振り返り」

この時間では、児童が表計算ソフトの共同編集機能を活用して振り返りを行う。児童には、振り返りを行う際、学習内容を確認したり、学習内容を既習のものと関係付けたりするだけではなく、他の児童の学び方を振り返ることも、自ら学習を進める力になることを伝える。授業者は、児童の学び続ける意欲を高めたり、その時間で児童が得た気づきを今後の学習につなげたりすることを意識してコメントを返す。

（2）主体的な学びを促す手立て

ア 学習計画表

松崎（2023）を参考に、児童の実態を考慮して作成したものを、初回の授業時に配付する（図1）。

「道しるべ」の欄には、教科書のページと対応する学習活動を記載し、児童が学習計画を立てる際の参考となるように、標準的な進度を示す。

それを基にして児童は、初回の授業において「学習計画」の欄に、3回のチェックテストを受ける日を含め、学習する内容を計画する。また、

11 円と球 3年学習計画表(9時間)				名前
日付	道しるべ	学習計画	したこと	タブレット カウント
10/29 (火)	まるい形について調べ ていこう。 <p.2・3>	・教科書p.2～5 ・QR動画2本 ・先生動画1本	・教科書p.2～4 ・QR動画2本 ・先生動画1本 ・プリント2枚 ・タブレットドリル2ページ	T
① / ()	まるい形について調べ ていこう。 <p.2・3>			

図1 第3学年学習計画表の一部

単元最後の授業では、単元を通して身に付けた知識や技能を活用して解く問題（ゴール問題）に取り組むことも伝える。

「したこと」の欄には、その時間内で取り組んだ学習活動を各児童が記入する。この学習計画表を活用することで、児童は、自ら学習を進めていけると考える。

イ カップサイン（図2）

松崎（2023）の授業では、生徒が自分の学習進捗を記入する「進捗表」を用いることがある。「進捗表」は、各生徒の学習進捗の確認ができるだけでなく、「生徒がだれに聞けばよいかや、だれに教えればよいかをわかりやすくすることで、協働をしやすい環境をつくるためのもの」（※5）としている。

本研究では、児童の発達段階を考慮し、学習状況を視覚化するために、3色の紙コップを各児童に配付する。

教えたり一緒に考えたりできる状態は青カップ、集中している状態は緑カップ、助けが必要な状態は赤カップとし、自分の状況を示すカップを一番上にして重ね、机に置くことを授業のルールとして位置づける。児童が互いの状況を知ること、自律の力を高めるための経験を生み出しやすい環境となり、主体的に学ぶ児童の姿につながると考える。

ウ ICT 活用

（ア）児童の主体的な学習を支援する動画コンテンツの活用
所属校で使用している教科書には QR コンテンツが付いており、児童は、1人1台端末を使って主問題の解説動画（図3）等を視聴することができる。さらに、児童が学び方を決定する際の選択肢を増やす目的で、ウェブ上に公開されている公共性の高い機関や、教科書出版社等が作成した学習支援動画を、筆者が5本程度精選する。そのリンク集を Microsoft teams 内のチャットに貼り、児童が選択しやすい環境を整えることで、児童の主体的な学びにつながると考える。

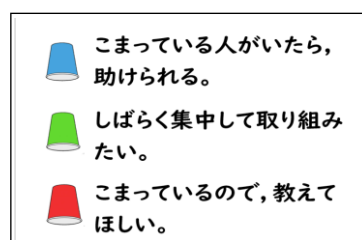


図2 教室に掲示したカップサインの説明

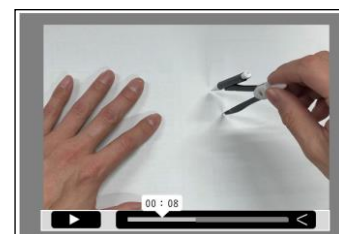


図3 啓林館「解説動画」を基に筆者作成

（イ）表計算ソフトの共同編集機能を活用した振り返り

振り返りに関して、文部科学省 StuDX Style のウェブサイトには「児童生徒それぞれが個人のセルに入力しながらクラスメートの記述を見られるので、学習内容を確認したり、自分の記述と比較したりできる。そうすることで、学びがより定着したり、深く思考したりすることにつながる。また、教師は全員の記述を瞬時に把握できるメリットがあり、即座にフィードバックができるなど、指導や学習の改善に活かせる。」（※6）との記載がある。このことから、振り返りに表計算ソフトの共同編集機能を活用することは、学習内容の理解につながることに加え、教師の見取りにも有効であると考えられる。

（3）本研究に関わる複式学級の長所

北海道教育委員会「学校教育の手引き」には、複式学級の長所と思われることの一つとして、「児童生徒が互いに親密な関係をもっている。」（※7）とあり、広島大学附属東雲小学校がまとめた著書の中では、「上学年は下学年に分かりやすく教えようとし、下学年は上学年の姿から学ぼうとする。」（※8）とある。このような複式学級の長所は、自律の力を高めるための経験を生み出しやすい環境づくりを後押しすると考える。

（4）本研究の検証方法

所属校で実践した授業の様子を撮影し、児童の発言や行動の中に主体的に学ぶ姿が見られたかどうかを分析する。また、児童の振り返りから学び方に関する記述内容を分析する。単元末には、単元で育成すべき資質・能力の習得状況を確認するテストを行う。さらに、「単元内自由進捗学習」に関するアンケート調査及び聞き取り調査を実施し、児童の主体的な学びに有効であったかを分析する。

3 所属校における授業研究について

所属校の第3・4学年複式学級5名を対象に、算数科の提案授業を計画した(表1)。

表1 学習計画表に記載した標準的な進度(啓林館を基に筆者作成)

	第3学年「円と球」	第4学年「面積」
1	まるい形について調べていこう。	・広さのくらべ方を考えよう。 ・1辺が1cmの正方形が何こ分あるかで面積をくらべよう。
2	まるい形のかき方を考えよう。	辺の長さに目をつけて面積の求め方を考えよう。
3	半径の長さをくらべよう。	面積の公式が使えるようにくふうして、面積を求めよう。
4	円の中にひけるいちばん長い直線について調べよう。	長さの単位がmのときの面積の表し方を考えよう。
5	円を組み合わせたもようのかき方を考えよう。	たとえ横の長さの単位がちがうときの面積の求め方を考えよう。
6	コンパスで、それぞれの長さを直線に写しとってくらべてみよう。	1㎡の大きさやいろいろなものの大きさを調べよう。
7	球について調べよう。	長さの単位がkmのときの面積の表し方を考えよう。
8	まとめをしよう。	面積の単位の関係について調べよう。
9	ゴール問題に取り組もう。	ゴール問題に取り組もう。

(1) 単元内における各1単位時間の流れについて

ア 「はじめの5分」

「単元内自由進度学習」による授業は、児童にとって初めてのため、第1時の前日に、プレゼンテーションソフトを用いて、10分間のガイダンスを行った(図4)。そこでは、児童に学習の内容だけではなく、学習の仕方も学んでほしいという、今回の提案授業における目的を伝えた。また、翌日からの授業にスムーズに取り組めるよう、児童が自分に最適だと考える学習計画を立案し、自らの判断で学んでいくという授業の進め方を説明した。

第2時以降は、前時の見取りや児童の振り返りから、児童に伝えたい内容を精選して作成した語りの原稿を基に、学級全体へ向けて説明をした。

イ 「みんなの時間」

第1時、2(2)アで述べた「学習計画表」に、児童は学習する内容を計画した。第2時以降、「はじめの5分」終了後、児童は学習計画表を開き、自ら立案した学習計画を確認し、各自で学習を進めた。

ウ 「振り返り」

授業時間が残り5分となると、児童は1人1台端末を使って振り返りに取り組んだ。

(2) 主体的な学びを促す手立てについて

ア 学習計画表(図5)

第1時、「みんなの時間」の一部を使い、各児童が単元全体の学習計画を立てた。全児童が初めて経験することであったため、学習計画表の学習計画に、道しるべの欄で示された内容を参考に、教科書のページ数を記載するだけに留まったが、児童は単元内で学ぶ大まかな学習内容を把握していた。

第2時以降、「みんなの時間」になると児童は、まず学習計画表を開き、本時の計画を確認した後に、各自が学習に取り組み、「振り返り」が終わると、学習計画表の「したこと」の欄に、その時間内で取り組んだ学習活動を記入し、自らが立案した学習計画と照らし合わせ、次時の学習計画を微調整していた。

イ カップサイン

提案授業の期間中、協働し合う機会は、当初の想定より少なかった。特に第4学年にお

2024年10月28日(月)	
明日からの算数について	
① いろんな力 ② カップサイン ③ 動画	
こんなこと書けたらいいなあ… ・今日つかんだコツ ・今日知ったこと	

図4 プレゼンテーション画面の一部

1. 広さのくらべ方を考えよう。<p.2-3> 1辺が1cmの正方形が何こ分あるかで面積をくらべよう。 <p.4-5>	2. 辺の長さに目をつけて面積の求め方を考えよう。 <p.6-7>	3. 面積の公式が使えるようにくふうして、面積を求めよう。
P.2~5	P.6~8	P.9~11

図5 児童の学習計画表の一部

いては、あらかじめ示していた学習材の量が多く、児童は、立案した学習計画の通りに進めることに集中して、カップサイン（図6）にまで意識が向いていないように見えた。



図6 カップサイン

ウ ICT活用

（ア）学習支援のための動画コンテンツの活用

第2時では、第3学年の全員がコンパスの使い方を学習する計画を立て、教科書にあるQRコンテンツの解説動画を複数回視聴していた。コンパスの脚を持ちながら円を描こうとしている児童に「コンパスはどう使えばいいんだろう。」と声をかけると、すぐに解説動画を視聴し直し、動画を停止させながら、コンパスの持ち手や操作方法について確認する様子が見られた。

（イ）表計算ソフトの共同編集機能を活用した振り返り（図7）

児童はこれまでも、表計算ソフトの共同編集機能を活用した振り返りを経験していることから、スムーズに取り組めており、他者参照によって、振り返りを記入できたと思われる内容もあった。

面積		
1	広さのくらべ方を考えよう。 <p 2・3> 1辺が1cmの正方形が何個… <p 4・5>	くんは、ほんとうすのさしをつかってきれいに線を引けていて、皮からは、さしを使っ、きれいに線を引こうと思った。たくさん書いてくれてうれしいです。友だちのやり方をよく見ることができていますね。すばらしいことです。いいやり方がありますよ！
2	辺の長さに見つけて面積の求め方を考えよう。 <p 6・7>	めあてやまめなど、自分で考えてきた。何個分などを数んだ。くんを教えられた。集中して勉強しながら、カップサインも見てくれてありがとう。めあてやまめも、自分で考えてきたのは、すばらしいです。
3	面積の公式が使えようようにくふうして、面積を求めよう。 <p 8・9>	正方形の公式は1辺×1辺だということも分かった。長方形の公式はたて×横だということも分かった。チェックテスト①をした。自信がある。自信があるって書ける。さんか、さっさいい。自分で読める勉強がしっけできていますから書けるんだね。本当にすごいことです。
4	長さの単位がmのときの面積の表し方を考えよう。 <p 10>	線を引くと、2つの四角形ができた。2つの四角形の面積を求めて、答えを求められた。そうだね。もう一つのやり方には、たどりつかなかった。教科書を読んでわからない場合は…
5	たてと横の長さの単位がちがうときの面積の求め方を考えよう。 <p 11>	1辺が1キロメートルの正方形の面積を1平方メートルだということが分かった。ノートを見やすく書いた。横頭に進んでいますね。しっかり、学習を自分で調整できています。ノートは、どの点を見せさせて書いた。見やすく

図7 振り返り画面の一部

（3）本研究に関わる複式学級の長所について

互いの学年が、どのような学習活動に取り組んでいるのかを気にしている様子であったが、異学年間で学び合うには至らなかった。カップサインが機能しなかった理由と同様に、児童は立案した学習計画の通りに進めるため、自分の学習に集中している様子が見受けられた。

4 成果と課題

（1）単元内における各1単位時間の流れについて

ア 「はじめの5分」

教師の語りの中で、良い学び方のモデルを示したことにより、児童が計画表を見ながら主体的に学習することを後押しできたと考える。

イ 「みんなの時間」

ほとんどの児童は、教科書の内容を確認した後、動画を視聴し、次に教科書の問題を解き答え合わせが終わると、ドリル等の練習問題に取り組んでいた。各児童が自ら学習を進めていく中で、自分に最適な学習活動の流れができ上がっていたと考える。

一方、児童が、教室内に設置した学習材コーナー（図8）を利用することは少なかった。このことから、学習材コーナーを設定する際には、児童の使ってみたいという意欲をかき立て、いくつもの選択肢の中から、自ら学び方を決定できるような環境設定が大切になると考える。



図8 学習材コーナー

ウ 「振り返り」

第2時の振り返りには「自分で勉強の仕方を考えたりするのが楽しかった。」という、自ら学びを選択決定することに関する記述があり、第4時には「動画を見たら直径がなにかがちょっと分かった。」という、自らの判断で学び方を選択し、理解できたことに関する記述があった。これらの振り返りから、児童が自ら学びを進める良さに気付いていた、自ら学びを進める自信を深めていった様子を見取ることができた。

（2）主体的な学びを促す手立てについて

ア 学習計画表

第1時の「みんなの時間」において、単元全体の学習計画を立案する際、第4学年の児童は、新聞紙で1㎡を作り、教室の面積を測定する学習(図9)を見つけて話し合い、全員で同じ日に取り組む計画を立てていた。その計画を実施する2日前、自身の判断で家庭学習に取り組み、進度を調整した児童がいた。当初、この一連の行動を一単元分の学習計画を児童が立案したことで、単元全体の見通しをもち、学習を調整したと筆者は捉えていた。しかし、提案授業の分析を進めるうちに、本研究の単元内自由進度学習における「主体的な学び」から外れているのではないかと考えるようになった。本研究において「主体的な学び」とは、「学習者としての子供自身が自らの学びをコントロールできること」と2で定義している。そこから考えると、計画を立案する段階で、友達のペースに合わせることを優先し、一人一人が自ら最適な進度で学習を調整できなかったと見るができる。



図9 新聞紙で1㎡を作り
教室の面積を測定する様子

イ カップサイン

聞き取り調査では、「相手が集中していることを知った上で行動できる場所がいい。」と回答した児童がおり、状況を判断して学習する一助になったと考える。

しかし、3(2)イで述べたように、提案授業を通して活用する姿は、当初の想定よりも多く見られなかった。用意した学習材の量が多かったことに加え、教師の個別指導を必要とする機会も少なく、単元の後半を児童が自ら学べたことから、今回の提案授業においては、カップサイン自体が児童の学びにあまり影響しなかったと考える。

ウ ICT活用

(ア) 学習支援のための動画コンテンツの活用

児童が自ら学習を進めていく際、全ての児童が毎時間利用していたことから、動画コンテンツは、児童の課題解決に有効なツールであったと考える。

また、予定よりも学習を速く進めた児童が、筆者の精選した学習支援動画を選択し、自分の興味関心に応じて復習に利用したことがあった。このことから、学習を深めるために発展的な内容の教材を準備しておき、児童の主体的な学びにおける選択肢を広げ、進度の速い児童の知的好奇心を満たすことが必要であった。

(イ) 表計算ソフトの共同編集機能を活用した振り返り

「面積を求めるときは長さの単位をそろえるのが大切だと思った。」という記述から、児童が順調に学習を進めている様子を見取れたつもりでいたが、単元末テストにおける同種の問題で正答できたのは、一部の児童であった。児童の見取りを指導に生かす際、共同編集機能の良さを生かし、即座に全員で共有するだけではなく、何度か定着を確認する機会を全員に設定することが、学習内容の確実な定着につながると考える。

(ウ) ICT活用に関する総括

本研究におけるICTを活用した手立ては、課題解決に有効であったり、考えを表出することが苦手な児童が他者参照することで考えをもつことができたりしたことから、児童の主体的な学びに効果的なツールであると考え。その効果を最大限に生かし、学習を進める速さに違いのある多様な児童の主体的な学びを支えるためにも、児童の知的好奇心を満たす発展的な学習材を準備しておき、児童が利用したくなるような手立てを講じる必要がある。

(3) 本研究に関わる複式学級の長所について

当初は、「児童生徒が互いに親密な関係をもっている。」「上学年は下学年に分かりやすく教えようとし、下学年は上学年の姿から学ぼうとする。」といった複式学級の長所が、自律の力を高めるための経験を生み出しやすい環境づくりを後押しすることを期待していた。今回、異学年間の学び合う姿は見られなかったが、これらの長所は、児童が自ら学習を調整して学ぶ場合、自分で解決できない時に教えてもらうなど、主体的な学びを支える土台になると考える。

（４）今後について

本研究では、児童に一単元分の学習時間を委ねたが、単元で育成すべき資質・能力の習得を確認する単元末のテストにおいて、知識・技能は、概ね満足できる結果であった。しかし、思考・判断・表現に関する問題で、課題の残る結果となった。単元の途中において、児童の到達度を確認する意図をもって行う３回のチェックテストについても、全員が合格することができた。しかし、２回目のチェックテストにおいて、児童が筆者に考え方を説明するパフォーマンステストを実施している間、順番を待つ児童がいたり、一時的に他の児童を見取ることができない状態になったりした。待つ必要が生じた場合には、先の学習に進むといった判断を、児童自らができるようにしていくことも、学習を調整する力につながると考える。

筆者の課題の一つである見取りに関しては、児童が立案した学習計画を基に、学びを進めたことで、個々の取組状況を把握することに集中できたため、「２つの学年を一度に見なければならない」という筆者の意識から、「第３・４学年の一人一人を見取る」という意識へと変化した。その意識の変化により、これまで以上に児童の表情やしぐさ、課題への取り組み方などに着目し、声かけや支援により児童の主体的な学習に生かすことができたことは、複数学年を同時に指導する上での手応えを感じることにつながった。

一方、児童に課した学習量が適切でなかったことは、児童が学習方法を選択できるような機会を与えられなかったことに加え、当初計画していた時間数で単元を終えることも困難となり、計画を見直すことにもなった。適切な学習量を設定することと、児童が個別で学習する方法を身に付け、自ら学習を進めることに慣れるまでは、学級の実態に合わせて、段階的に児童に委ねる時間を増やしていくなどの単元計画の調整が考えられる。

本研究における提案授業を通して、新たな課題は見つかったものの、アンケート調査における「単元内自由進度学習」に対する回答は、全員が好意的であった（図10）。

提案授業の前後で、未履修の学習内容に関して、児童自身の力で学習する自信を問う項目では、図11のような回答となり、全員が自信を深める結果とはなかったが、回答に変化の無かった児童への聞き取り調査では、表２のような回答が得られ、今後に期待がもてる結果となった。

これからも引き続き、児童の学習意欲を高める意識をもち、今回見いだした新たな課題を改善し、適切に学びを進められる環境設定を行うことで、主体的に学ぶ児童の姿を目指していく。

今回の学習方法はどうか。	
とてもよかった	2人
よかった	3人
あまりよくなかった	0人
よくなかった	0人

図 10 アンケート結果①

まだ習っていないところを、自分で学習する自信はありますか。		
	授業前	授業後
A	3	2
B	2	3
C	2	2
D	3	3
E	3	3

4…とても自信がある 3…自信がある
2…あまり自信がない 1…自信がない

図 11 アンケート結果②

表 2 聞き取り調査結果の一部

	個別の質問内容	児童の回答
児童 C	学習前（あまり自信がない）と学習後（あまり自信がない）で変化しなかったが、どうすれば自信がもてそうか。	・ 3 回ほど（自分が最適だと考える学習計画を立案して学びを進めることを）やってみる（と自信がもてるようになる）。
児童 E	学習前（自信がある）と学習後（自信がある）で何も変化はなかったか。	・ 今までは待たずしていただけど、待つことがない。 ・ 自分で進めていくのが好き。 ・ 分からなくても教えてもらえる。

<引用文献>

- ※ 1 中央教育審議会『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』 p.18（2021）
- ※ 2 奈須正裕『個別最適な学びと協働的な学び』東洋館出版社 p.39（2021）
- ※ 3 中谷素之「自己調整学習・自由進度学習の可能性」『最新教育動向2024』明治図書 p.133（2023）
- ※ 4 田村学『深い学び』東洋館出版社 p.18（2018）
- ※ 5 松崎大輔『生徒の自律と自立を促す 単元内自由進度学習』明治図書 p.150（2023）
- ※ 6 文部科学省『StuDX Style』 3 - ⑩ <https://www.mext.go.jp/studxstyle/students/16.html>
- ※ 7 北海道教育委員会『学校教育の手引（教育課程の編成・実施）へき地・複式教育』 p.4（2024）
- ※ 8 広島大学附属東雲小学校『新訂 複式教育ハンドブック』東洋館出版社 p.19（2024）

<参考文献>

- ・加固希支男『「個別最適な学び」を実現する算数授業のつくり方』明治図書（2022）
- ・教育の未来を研究する会『最新教育動向 2024』明治図書（2024）
- ・ぎょうせい『個別最適な学びで協働的な学びをどう実現するか ～令和の授業イノベーションを考える』ぎょうせい（2022）
- ・佐々木潤『個別最適な学び×協働的な学び×ICT入門』明治図書（2022）
- ・竹内淑子『教科の一人学び「自由進度学習」の考え方・進め方』黎明書房（2019）
- ・難波駿『超具体！自由進度学習のはじめの1歩』東洋館出版社（2023）
- ・蓑手章吾『自由進度学習のはじめかた』学陽書房（2021）
- ・文部科学省『令和6年度学校基本調査』（2024）